

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	1980 年代以降の女性にとって「働く」の意味変遷 ーリクルート社発行就職情報誌『とらば一ゆ』を手がかりにー
キーワード	①『とらば一ゆ』、②就職情報誌、③働く女性

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	ハウ エイセイ 彭 永成
配付時の所属先・職位等 (令和 6 年 4 月 1 日現在)	桃山学院大学 社会学部 講師
現在の所属先・職位等	桃山学院大学 社会学部 講師
プロフィール	1993 年、中国湖南省生まれ、結婚情報誌『ゼクシィ』と同年。 2015 年武漢大学新聞と伝播学部卒業。湖南衛視テレビ局の実習ディレクターや地元の外国語高校の日本語教師を経て、2017 年 4 月京都大学教育学研究科に入学し、2022 年 3 月博士号（教育学）を取得。2023 年 4 月から桃山学院大学社会学部講師。単著『『ゼクシィ』のメディア史 花嫁たちのプラットフォーム』（創元社、2023 年、第 45 回出版学会賞奨励賞）

1. 研究の概要

本研究は、1980 年代以降、女性にとって「働く」ことの意味はどのように語られてきたのかを、リクルート社が発行していた女性専用就職情報誌『とらば一ゆ』（1980-2007）を対象としたメディア史的考察を通して明らかにすることを目指すものである。

これまで、就職活動や就職メディアに関しては多くの研究が蓄積されてきた。最も新しい社会学的研究としては、妹尾麻美（2023）『就活の社会学 大学生と「やりたいこと」』が挙げられる。同書では、就職活動において大学生の意欲と熱意が重視されるようになってきた経緯が明らかにされている。また、就職活動の社会史を綿密に考察した研究（難波功士、2014）や、就活メディアの誕生から現在までの歴史を整理し、その中で発信されてきたメッセージを読み取る研究（山口浩、2023）も存在する。しかしながら、これらの研究においては、女性が置かれている就職情報環境や、彼女らが日常的に接触する就活メディアに焦点を当てた分析が不十分である。

一方、女性と就職をめぐる研究も数多く存在する。たとえば、落合恵美子（1997）は、労働力率の M 字型カーブの年齢推移を出生コホートごとに比較し、戦前に比べて戦後の女性たちは社会進出を果たしたことの反論をなされた。また、濱貴子（2022）は、「職業婦人」と呼ばれた女性たちの社会進出の実態やその表象を分析し、ジェンダー秩序の形成と変容のプロセスを歴史社会学的に明らかにした。

井上輝子（1989）によれば、メディアが描く女性像はその時代のその社会が期待する女性についての規範が表現されており、メディアは「あるべき」「あるはずの」女性像を提示している。特に、年齢や職業などカテゴリーごとに細分化された女性雑誌は、読者に対して「こういう時期はこうであるべき」という理想像を提示しやすいメディアであると言えよう。こうした視点から、これまで多くの女性と就職の社会学的な研究が蓄積されてきたとはいえ、女性雑誌にみられる「働くこと」の意味づけの変容を論じた橋本嘉代（2010、2017）の論文も、情報誌

のように理想を語る言説・表象と現実を提示する情報が混在するメディアについての検討がほとんどなされてこなかった。

この点に関連して、ハロルド・アダムズ・イニスの「社会における知識の独占状況が権力のあり方を規定する」(佐藤卓己、2020)というテーゼがある。これに従えば、女性向けの情報誌はこれまで男性や専門家たちによって独占されていた、就職、スクール、育児に関する知識を広く共有可能にし、知識の民主化をもたらすメディアと捉えることができる。また、佐藤卓己(2015)はミディウム(中間性)を雑誌メディアの最大の特性と挙げ、雑誌が開拓したミディウム文化界はまさに青年(中間者)に開かれているとした。このようなミディウムの特性を踏えれば、情報誌というメディアは、単なる商品・サービスのカタログにとどまらず、青年にとってそれはライフスタイルのガイドブックとしても機能しうる。(吉田則昭、2017;島岡哉、2015)。

以上の議論を踏まえると、1980年代以降の青年期女性を主なターゲットとした『とらば一ゆ』は、就職情報を開示することで彼女をエンパワーする存在であり、働くことのガイドブック的な存在といっても過言ではなかろう。働く女性への注目が高まりつつも、結婚退職が常識とされていた1980年代において、日本初の女性向け求人情報誌『とらば一ゆ』は、仕事の意義をいかに構築し、どのように目指すべき理想像を発信してきたのか。本研究では、まず1980年代の『とらば一ゆ』に着目し、誌上に提示された「働くこと」の現実と理想のイメージを明らかにした。

その結果、これまでの女性誌研究が主に言説や表象を通じて理想像を読み取ったのに対し、本研究では情報コンテンツに織り込まれた「働くこと」への憧れや意味づけを析出することができた。また、『とらば一ゆ』における1980年代の誌面構成の変化を追うことで、均等法以降における働く女性の内部的分化に対するメディアの応答が明らかになり、女性労働をめぐるメディア環境の変化も把握することができた。

2. 研究の動機、目的

日本の働く女性にとって重要な転換点とされる男女雇用機会均等法(以下均等法)は、2025年に成立40周年の節目を迎える。均等法の成立により、女性の職場での平等な待遇が進み、管理職への登用や賃金格差は正の動きが広がるなど、さまざまな功績が語られてきた。

均等法の成立は、日本における働く女性にとって象徴的な出来事であり、1980年代は「女の時代」とマスメディアで謳われた。これを支えるもう一つの実例は、均等法よりも前に登場し、女性と仕事を結びつくと言明したリクルート社の『とらば一ゆ』である。1980年に創刊されたこの女性向け情報誌は、当時の就職メディアマーケットにおいても特別な存在であり、1981年には女性の転職の代名詞として、「とらば一ゆする」「とらば一る」などが流行語となった。

しかし、女性の職場進出の環境を整うようになっていくにつれて、『とらば一ゆ』は2007年に休刊となり、その後もサービスを続けているウェブサイト「とらば一ゆ」は2025年現在においても存在するものの、「とらば一ゆする」「とらば一る」という言葉はほぼ時代の記憶として風化している。時代の変化に伴い、『とらば一ゆ』は求職中の女性にどのような求人情報を提供し、どのような理想像を伝えていたのだろうか。紙媒体の廃刊とウェブへの移行には、情報様式と理想像の変容も伴っており、それが女性たちの就職環境のどのような変容を意味しているのか。

これらの問いに答えるため、本研究はリクルート社発行の女性向け就職情報誌『とらば一ゆ』のメディア史を追い、1980年代以降の日本社会に生きる女性たちの、働くライフストーリーの変化を辿ることにした。

また、申請者はこれまで同じくリクルート社発行の結婚情報誌『ゼクシィ』を研究してきた(2023『『ゼクシィ』のメディア史 花嫁たちのプラットフォーム』創元社、352頁)。『ゼクシィ』を通して、女性を主な読者とする結婚情報のメディア史的変遷を追い、「結婚」と「退職」の関係性の変化に気づいた。1990年代の『ゼクシィ』には、結婚前の手続きの一環として、勤務先への「退職」挨拶は定番として紹介されていた。だが、2000年代以降ではそうした必然のような結びつきがなくなり、結婚後も働き続けることはもはや当然とする記事が遍在的

に見られるようになった。この変化は、女性たちの働くことの意味がどのように変わったのかを示唆している。

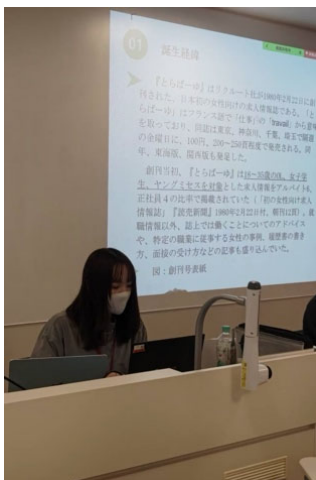
3. 研究の結果

時間制限のため、申請者は1980年代の『とらば一ゆ』創刊からバブル崩壊前までを主要な分析対象として選定した。資料収集に関しては、国会図書館東京館や関西圏の大学で関連資料を閲覧・複写したほか、『とらば一ゆ』の表紙や目次は年間通じて遠隔複写を利用して収集を続けてきた。分析結果は、2024年6月に開催された日本メディア学会2024年度春季大会、および同年11月のメディア史研究会関西部会で口頭発表した。

まず、2024年6月に行なった日本メディア学会2024年度春季大会では、ワークショップ9で問題提起者として、『とらば一ゆ』のメディア史 ハイスペックな「理想」から地道な「現実」へ」というタイトルで発表した。この発表では、『とらば一ゆ』が紙の雑誌として発行された27年間で6つの段階に区分し、創刊された1980年から均等法施行以前の1985年まで、誌上に構築された働く女性の理想像の変遷を中心に発表した。その結果、80年代初期に登場した『とらば一ゆ』は、30代以下の若い女性をターゲットに求人情報を提供し、女性が就職できる職種のイメージの開拓にも寄与した。誌面には「職場の花」や「スーパーウーマン」といった一見矛盾する理想像が描かれた。1984年から均等法が本格的に議論されるようになると、誌面は「じぶん維新」と呼ばれる大規模なリニューアルを実施し、表紙やテレビCM、記事の構成において、欧米文化への憧れを強調し、働く女性＝強い女性という理想像を一層強調するようになったことが明らかになった。



同年11月開催のメディア史研究会関西部会では、「交錯する欲望：働く女性理想像の二重構造—求人情報誌『とらば一ゆ』のメディア史的研究」というタイトルで発表を行った。今回は、メディア学会での発表を踏まえ、均等法施行後の1986年から1991年のバブル崩壊寸前のまでの時期における理想像の変化と、同時期の『とらば一ゆ』が女性の求職活動に果たした役割の変化に焦点を当てた。



まず、「じぶん維新」後の『とらば一ゆ』の注目関心は、これまで取り上げていたアメリカ女性の労働権利や性差別に関する問題から、海外の働く女性のファッションや日常に関する内容へとシフトしたことが明らかになった。スーパーウーマンという理想像は、内面的な強気から外面的な消費活動に転換し、実現可能なものとして描かれた。しかし、1987年6月刊行分から、『とらば一ゆ』はさらに大きな変化を迎えた。「じぶん維新」以来表紙を飾ってきた白人女性の写真が、日本人女性のイラストに変わり、版型も女性ファッション誌に近いA4ワイド判に変更された。内容面では、1982年から始まったアメリカ女性誌WORKING WOMANとの連携が途切れ、表紙や記事から海外の働く女性の姿が消えた。代わりに、『とらば一ゆ』誌上では職場における美人規範が強調され、これまで分量の少なかったファッション、余暇、料理、イベント、花嫁修業、教養情報も掲載するようになった。「じぶん維新」の際、当時2代目に着任した江上編集長は、女性誌のほとんどが女性のプライベートな生活に向けていることに対して、『とらば一ゆ』の編集はプライベートとオフィシャルを融合して柱とすることが目標であると述べた。だが、1986年以降の『とらば一ゆ』をめぐるみると、人間関係、心理テスト、トレンドなど女性ファッション誌でお馴染みのプライベート情報まで掲載されており、女子大生向けのファッション誌（例えば『JJ』など）の掲載内容とは量的な差以外、種類のにはあまり変わらなかった。江上編集長が目指す「ハード」な仕事情報誌から「ソフト」なワーク・ライフ情報誌へと変化したことがわかる。

このような変化が生じた一つの理由は、女性の大学進学率の増加が考えられる。1980年に

このような変化が生じた一つの理由は、女性の大学進学率の増加が考えられる。1980年に

における女性の大学進学率は、4年制大学が12.3%、短大が21.0%で、合計は33.3%であったが、1990年代は女性の大学進学率が大幅に伸び、4年制大学進学率は1990年に15%を越え、30年ほど男性に遅れてエリート段階からマス段階に入る（短大の進学率も22%）。『とらば一ゆ』創刊以来は、仕事に参入できる大卒女子は増え続けていることが明白であった。一方、『労働白書』（1991年版）の労働大臣のはしがきによれば、「我が国経済は石油危機、円高を克服して発展を続けてきましたが、これには新規学卒者を中心とした若年層労働者や昭和50年以降増加を続けてきた女子労働者が大きな役割を果たしてきたと考えられます」と言う。女性と青年に焦点を当てた同白書は、過去5年間を対象として分析したところでは、彼らの役割は、労働力の単なる供給確保の観点に留まらなかった。日本経済の環境変化に対する「適応と柔軟性」の発揮において、「女子や若年層の貢献も大きかったと」評価されるのである。女性労働者の比率の上昇や職域の拡大を含めて、竹中恵美子（1989）は終身雇用正規労働力からなる「人材ストック型」労働市場と、非常用・非正規の「人材フロー型」労働市場の区別を踏まえながら、労働力の女性化、すなわち雇用者のなかの女性比率の上昇に伴うフロー型の拡大、及び女性労働の「エリートとマス」の二極分解を強調する。

こうした背景を踏まえれば、『とらば一ゆ』の変化は、「じぶん維新」時期のエリート路線と決別し、より広範な「マス」層の働く女性に対応しようとする意図が表れたものと言える。今後は引き続き、このような変化が生じた理由またはその意義について考察を深めていきたい。

4. 研究者としてのこれからの展望

個人の研究テーマである「女性とメディア」については、『とらば一ゆ』の研究を継続しながら、リクルート社発行のスクール情報誌『ケイコとマナブ』や育児情報誌『赤すぐ』にも視野に入れます。女性のライフコース情報がビジネス化していく過程において、人生の選択肢はどのように変化し、また変わらなかったのかを、引き続きメディア史の視点から深掘りしていきたいと思います。

研究と教育活動以外、いつも温かく異国での生活を支えてくれる友人、同僚、先輩方の存在は、心の大きな支えです。言葉の壁や文化の違いに戸惑うこともあります。日本で育った人間関係や生活の質を大切にしながら、いつになっても「理解し合いたい」という気持ちを忘れずに、日々の交流と理解を頑張っていきたいと思います。国際社会の一員として、そして女性研究者として、仕事と生活の両方をバランスよく取り組みながら、未来を築いていけたらと願っています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、研究奨励金を賜り、誠にありがとうございました。ご支援により、資料の収集と分析作業に集中することができ、研究を進める上で大変大きな励みとなりました。おかげさまで、2024年度は多くの貴重な資料を手に入れ、比較的に充実した成果を上げることができました。

『とらば一ゆ』研究を進める中で、働く女性が直面してきた労働環境の厳しさを、歴史的資料のみならず、自分自身が置かれている職場を通じて一定程度実感することができました。現在でも、職場や社会における完全な平等はまだ遠く、女性たちは今なお多くの困難に立ち向っています。女性研究者もまた一種の働く女性として、どの職場でも同じように、結婚や育児などさまざまな事情により仕事や研究が中断してしまうことが少なくない現状があります。そのため、女性研究者を支援する研究奨励金がどれほど貴重な応援なのか、改めて痛感いたしました。『とらば一ゆ』を通じて女性と労働のメディア史を読み解くことは、研究テーマであると同時に、自身の人生課題にも深く関わるテーマであると感じております。

働く女性はどのような情報環境に置かれ、どのような「憧れ」が提示されてきたのでしょうか。ネット社会において女性のライフコースと仕事の関係性についての語りは変化したのでしょうか。これらの問いを胸に、今後ともより一層の努力を重ねて研究に取り込んでまいります。

改めまして、心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。